

十二、木造如来形立像

江戸時代

安楽寺 大字塙字上町

像高 四九・〇cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

現在、この像は両手首より先を欠失しており、詳しい尊名を知ることはできない。肉髻相をあらわし、螺髪を彫出し、水晶製の肉髻珠、白毫珠をつけている。左肩を覆い右腋下を通る衲衣と、右肩にかかる偏衫をつけ、両足をそろえて立つ。

構造は、頭部を前後に矧ぎ、三道下で体軀に挿し込んであるようである。漆箔が厚く施され、このあたりの構造はよくわからない。体軀は前後に二材を矧ぎ、両肩先より各袖先まで通してそれぞれ一材を体側に矧いでいる。さらに細部に小材を矧いでいる。

記録によれば、当寺は領主佐竹義重の寄付により、常陸国那珂郡常福寺第九世空誉玉泉上人を開山とし、天文二十三年（一五五四）に建てられたといわれる。しかし当寺には創建当初に溯る遺品はなく、この像もつくられた年代はずっと下る。技巧的で、一見調和よく彫刻されているようであるが、お顔の表情などは無気力に流れ、形式化も



木造如来形立像

進んでいる。

十四、木造聖観音菩薩坐像

室町時代

湯舟観音堂

大字山形字桜下

像高 五二・一cm

一木造 彫眼 素地仕上げ

前面のみの宝冠を戴き、宝冠正面を龕形に彫り窪め化仏（欠）をおく。左脇腹に僧祇支をあらわし、背面より右肩、右腕に偏衫をかける。衲衣は左肩を覆い、右腋下を通る。両手屈臂して膝上におき、左右重ねて禅定印を結び、右足を上にして結跏趺坐

する。

構造は、髻頂より宝冠を含め、体軀を通して地付まで、像のほぼ中心に木心をこめた一材で彫出する。内刳はない。脚部は、裳先をも含んで横に一材を矧ぐ。両手は一材で彫出し、各袖口に矧ぐ。両手及び脚部は後補で、宝冠化仏を欠失する。

十五、木造阿弥陀如来立像

江戸時代

湯岐阿弥陀堂

大字湯岐字上平

像高 四八・五cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔